

---

# 大革命前後のフランスの音楽教育

## ——カトリックと共和派の闘争の狭間で

井上さつき（愛知県立芸術大学音楽学部教授）

---

### 1. はじめに

フランス革命の意義をどのようにとらえるかについては諸説あるが、革命を通じて、フランスが近代的な国民国家となったことは確かであろう。音楽教育もまた、フランス革命を機にあり方を大きく変えることになった。しかも、そのあり方は、政体の変化につれて、大きく揺れ動いた。

アンシャン・レジム期のフランスでは、音楽教育はカトリック教付属の「メトリーズ」で行われており、それ以外の組織としては、劇音楽の需要に応えるためにアンシャン・レジム末期の1784年に設立された王立歌唱・朗唱学校が存在していた。しかし、革命後、1795年に設立されたパリ音楽院〔コンセルヴァトワール〕の直接の母体となったのは軍楽隊であった。軍楽隊の学校を元に、王立歌唱・朗唱学校を吸収する形で、パリ音楽院が作られたのである。

パリ音楽院は近代的な音楽学校の嚆矢として知られるが、その前後のフランス音楽史をひもといってみると、カトリックが国政と結びついた時期に、パリ音楽院と対立する動きが活発になっていることが分かる。

本論文ではカトリックの教会音楽家養成のための機関であったメトリーズに注目し、それが、革命の前と後とでどのような変遷を遂げたかについて論じ、フランスの音楽教育と政治体制との関係を明らかにしていく。

### 2. アンシャン・レジム下のフランスの音楽教育——「メトリーズ」の存在

大革命以前、カトリックはフランスの国教であった。人々は人生の節目ごとに、初聖体拝領、堅信礼、婚姻、終油といったカトリックの秘蹟を施され、それらのデータは教区簿冊に克明に記録された。地方行政システムが確立してい

なかった当時、今日における役所の役割を担っていたのは、全国に網の目のようにはりめぐらされていたカトリック教会の教区組織であり、それを管轄する司祭であった。

フランスのカトリック教会はローマ教皇庁から相対的に自立し、国家の教会という性格を色濃くしていた（これはガリカニスム〔フランス国教主義〕と呼ばれる）。教会は絶対王政の行政機構に組み込まれていたのである。カトリック教会はまた、施療院や捨て子養育院の経営等、さまざまな社会福祉活動に携わり、また、教育機関としての役割も重要だった。修道会がコレージュを営み、エリート教育を担っていたことはよく知られているが、さらに、各教区に「プチト・ゼコール（小さな学校）」が置かれ、民衆の子弟に初歩的な読み・書き・計算が教えられていた。この民衆向け教育は良きカトリック教徒になるべき心得の取得にあったことから、お祈りや聖歌、教理問答などを子供たちに暗誦させることや、聖人伝の読み聞かせなども行われた。

カトリック教会が教育機関としての役割を果たしていたという点では音楽家の養成も例外ではない。アンシャン・レジーム下のフランスで音楽教育を一手に担っていたのは、メトリーズであった。メトリーズの基本的な役割は、作曲家であれ、器楽奏者であれ歌い手であれ、教会音楽家を養成することであり、男子のみが対象とされた。アンシャン・レジームの時代に音楽家になるためには、メトリーズに10年近く通い、歌やオルガンなどの楽器を習ったり、作曲の初歩を教わったりすることが必要だった。ゴセック、メユール、ルシュウルなどは、革命期に新しい形式の音楽を創出した作曲家たちであるが、彼らはみな、メトリーズで音楽教育を受けていたのである。

革命前のフランスには大聖堂（司教座聖堂）や重要な教会には必ずメトリーズが設置され、フランス全土で400以上とも450以上ともいわれるメトリーズが存在していた。パリを例にとれば、もっとも有名なのはノートル＝ダム大聖堂のメトリーズだったが、サント＝シャベルやサン＝ポール、サン＝ジノサン、サン＝ソブール、サン＝ジェルマン・ロクセロワなどの教会のメトリーズも有名だった。メトリーズは無償で音楽教育を所属している子供に施したばかりでなく、職も世話した。これらのメトリーズには毎年200万フラン以上の予算が使われていた。ちなみに、当時王室の音楽関係の予算（礼拝堂とシャン

ブル)は40万フラン強であった。大革命前のフランスは音楽教育に多額の予算を割いていたわけである。

メトリーズの定員は2人から10人までで、シャルトル、ルーアン、パリの各大聖堂にのみ、12人の生徒がいた。彼らは8歳の誕生日を迎えるまでにメトリーズに入るのが一般的で、美しい声と、正しい音程で歌えることが条件だった。

メトリーズに入学するためには、生徒の空席が出るのを待たなければならなかった。メトリーズの生徒が学校を離れて、初めて次の生徒をリクルートすることができた。メトリーズに空席ができたことは教会を通じて告知された。多くの場合、子供は両親か司祭に連れられて試験を受けにきたが、その場合、合格不合格に関わらず、彼らの旅費は教会参事会によって支払われた。志願する子供がない場合は、楽長みずから地域をリクルートのために回ることもあり、さらには、ほかの地区の楽長たちにも応援を要請した。たとえば、1762年当時シャルトル大聖堂の楽長だったドラランドは、才能ある少年のオーディションをするために、35キロ離れたドゥルーまで出張したことが知られている。この少年はすでにドゥルーの参事会教会の先唱者を務めていたため、シャルトル大聖堂のメトリーズの試験におおやけに応募する気も、試験に通るかどうかわからないのに、シャルトルまで出向く気もなかったからである。いわば、ドラランドは他の聖歌隊の少年を「引き抜く」ために旅をしたわけであり、こうした場合の、楽長の旅の費用も教会参事会が負担していた(Br 思 an : 73)。

メトリーズに入るための試験は、教会参事会員たちの前で、志願者が一人ずつ歌うことによって行われた。合格者には正式な出生証明書等の提出が義務づけられ、さらに、両親には「聖アンヌの聖遺物にかけて」、彼らの子供がきちんとした生まれであることを誓わなければならなかった(Br 思 an : 74)。つまり、メトリーズに入れるのは、カトリック信者の子供だけだったのである。ちなみに、国王の名においてプロテスタントに信仰の自由と戸籍が与えられたのは大革命のわずか2年前の1787年のことだった。

メトリーズで学ぶ少年たちの役割は教会の合唱において単旋聖歌をできる限り完璧に歌うことであつた。彼らは、早朝の祈りから夕べの祈りまで、あらゆるミサに参列しなければならなかった。ミサの合間に、彼らは音楽や他の教科

を学んだ。レスカの記述によれば、音楽に関しては、「シャン・シュル・ル・リーブル」〔単旋聖歌の上に即興的に他の声部をつけて多声化すること〕と伴奏法と作曲のレッスンは楽長が担当し、才能のある生徒にのみ、教会オルガニストがオルガンを教えたという。時折、外から教師が来て、チェロやファゴットなどのほかの楽器を生徒たちに教えた。これらの楽器は合唱やモテットなど伴奏に活躍した。一般学科としては、文法、つづり方、ラテン語が教えられた。例えば、18世紀半ばの資料になるが、パリのメトリーズに所属する生徒の一日の日課を見てみよう。これは1748年の規則に基づくものである（Lescat: 20）。

午前6時半 起床、祈祷所で祈り

午前7時～一時課の開始15分前まで ラテン語の勉強

朝食

三時課 ノートル＝ダム大聖堂でミサ

午前10時半から12時 音楽のクラス

正午 昼食

午後1時～2時 音楽の講習

晩課で歌う唱句の練習

午後4時～6時半 ラテン語のクラス

午後7時 夕食

自由時間

午後8時半 就寝

なお、早課がある場合には、午後11時に起きてミサを済ませた後、（夜中の）2時に再び寝るという日課だった。

これはかなり厳しい日課であり、楽長の横暴さに耐えかねて、メトリーズから生徒が脱走することもあった。例えば、作曲家のボイエルデューはルーアン大聖堂のメトリーズから逃げ出したことが知られている。

生徒が変声期を迎えると、メトリーズでの勉強は終わりになった。生徒がメトリーズを去るにあたって、教会参事会は特別手当を与え、見習いをするため

の先生を探したり、メトリーズの副楽長の職を探したりした。つまり、メトリーズを出た後の、生徒の身の振り方まで面倒を見ていたわけである。

### 3. フランス革命以後のメトリーズ

フランス革命の期間は、たかだか10年に過ぎない。しかしその間、フランスは三部会の召集からバスティーユの占拠（1789年7月14日）を経て、封建制の廃止と人権宣言（8月）、共和国宣言（1792年9月）、ルイ16世の処刑（1793年1月）、ジャコバン党による恐怖政治（1793年～1794年）、テルミドールのクーデタ（1794年7月）を経て、ナポレオン・ボナパルトの登場に終わる激動の時代を体験した。一方、対外的には1792年に対外戦争がはじまり、最初は防衛戦、ついで拡張戦、という長い対外戦争の時代が続いた。

教会は1789年8月、封建的諸権利を放棄し、10分の1税も廃止されたが、これは、従来自前で維持してきた教会、学校、神学校、施療院、貧民救済などの諸事業の財源を喪失し、国家に全面的に依存することを意味した。同年11月には修道院を含む全教会財産の国有化の提案が可決され、翌90年2月には修道院の統廃合が決定され、7月には「聖職者民事基本法」によって教会は国家の支配下に置かれ、聖職者は国家によって俸給を支払われる公務員となった。

音楽教育の観点から言えば、この時期、劇的な変化が起こった。国家の「非キリスト教化」の歩みと連動して、1791年、それまで音楽教育の大半を担ってきたメトリーズが全面的に廃止されたのである。これにより、フランスにおける宗教音楽家の育成はいったん途切れた。音楽教育は、王立歌唱・朗唱学校も含めて新しく登場したパリ音楽院に集約されたのである。

### 4. 政教協約「コンコルダート」以後

1795年からはじまる総裁政府の時期に、ナポレオンが頭角を表し、クーデタを断行し、権力を掌握する。卓越したリアリストであったナポレオンは革命期の混乱を收拾し民心を安定させるためには、ローマ教皇庁との関係修復が不可欠と判断し、1801年7月、1年あまりの交渉の末、政教協約「コンコルダート」を締結した。これによって、「共和国政府は、カトリックにして使徒伝来のローマの宗教が、フランス市民の大多数の宗教であることを認め」、この宣言とひ

きかえに、教皇はフランス共和国を承認した。「国教」ではなく、「大多数の宗教」という表現は、カトリック以外の宗派や宗教への寛容に道を開くものであったし、国家の世俗性はゆるぎなく、教会は国家に完全に従属することになった。

こうした状況の中で、1802年以降、メトリーズは再び設置された。しかし、たとえばパリのノートル＝ダム大聖堂のメトリーズは1802年以降再建されたものの、その規約が新たに定められるのは1807年に入ってからのものであったし、その活動も微々たるものにとどまった。1807年、宗教大臣M. ド・ポルタリスによってメトリーズの再建を求める報告書が出され、助成金が議会で可決されたが、効果はあまり上がらなかった。1813年、新しい宗教大臣M. ビゴ・ド・プレアムヌーは司教の間で行ったアンケートの結果に基づいて、皇帝ナポレオンに対し、メトリーズと宗教音楽は破滅的な状況に陥っているという報告書を提出した。それによれば、当時のフランスでは30人ほどの楽長しか存在せず、オルガニストはほとんどいない状態であった。この報告書では、助成金を与えて、各大聖堂に聖歌隊とメトリーズを設置することが提案されていた。皇帝ナポレオンはこの提案に賛同し、以後、パリ、リヨン、ボルドー、エクス、モーなど、さまざまな司教区でメトリーズが再建された。

## 5. 王政復古下の音楽教育

1814年、ナポレオンが失脚し、第一王政復古が始まると、カトリックは再び勢力を取り戻し、大きな揺り返しが始まった。王位についたルイ18世のもとで、カトリックは再び国教となり、神授王権が正当性の原理として復活したのである。メトリーズも重要視され、県の予算と市町村議会の予算に補助金が計上されるようになった。さらに、王政復古末期のシャルル十世統治下（1824－30）の1826年には、メトリーズの予算の一部は国庫から支出されるようになった。

こうして、王政復古の時代には教会音楽家の育成に再び光が当たる一方、革命の産物とみなされたパリ音楽院は、一転して、抑圧の対象となった。ここで、パリ音楽院の歴史に立ち入る余裕はないが、1814年11月7日、パリ音楽院の創設者であり、1795年以来院長の座にあったベルナル・サレットは政治的な前歴を理由に罷免され、パリ音楽院の冬の時代が始まった。その後、エル

バ島から脱出したナポレオンが再び咲く百日天下の時期、サレットは再びパリ音楽院の院長に任命されるが（1815年3月23日）、ナポレオンがワーテルローの戦いで敗れて、第二次王政復古の時代が始まると、再度罷免されてしまう（1815年12月28日）。音楽教育は一般に政治とあまり関係がないように思われるが、政治体制と密接に連動していたわけである。

ナポレオンの時代には、パリ音楽院は財政危機のあおりを受けて、予算が削減され、教員数や生徒数を減らさなければならない事態に陥ったこと（1800年、1802年）はあったものの、存続自体が問題になることはなく、近代的な新しい教育機関として、順調に発展していた。ところが、王政復古下、パリ音楽院は存続すら危ぶまれ、百日天下の後、サレットが再度罷免された後、1816年3月には名称を「王立歌唱・朗唱学校」と変えて再出発することになった。この名称は、1784年にルイ16世によって作られた学校のものであった。革命前の状況に戻したいという王政復古時代のアナクロニズムの一例である。

パリ音楽院は新しい名称に変えられたときにスタッフの削減も行われ、約30名の教授が失職したが、多くの教授陣は新しい学校にそのまま移った。しかし、生徒数は1816年の時点で140名にまで減少した。行政上の最大の変化は、新音楽院の管轄官庁が、第一帝政期の内務省に変わって、宮内府になったことであった。新しい学校の長、視学長官に就任したのは、フランソワ・ペルヌであるが、院長（ディレクター）という名前が復活するのは、ペルヌに引き続いて1822年から長の座についたケルビーニからであった。

こうして王政復古下、パリ音楽院が縮小されて、困難な時期を迎えていたころ、まったく新しい音楽教育の機関が生まれた。それが1817年、教会音楽家の養成機関として認可されたショロンの「初等歌唱学校」である。

## 6. ショロンの音楽学校

アレクサンドル・ショロン（1771－1834）はフランス最初期の音楽史家であった。彼は過去の音楽の真価を伝えることに勢力を傾け、楽譜の出版、ついで、ファイヨルと協力して『音楽家事典』を刊行し（1810—11）、過去の音楽に関する知識の普及に努めた。

ショロンは教会音楽の状況を憂い、『すべての教会においてローマ教会（ヴァ

チカン)の歌を復活させる必要性についての考察』を著し(1811)、1812年には宗教的な儀式と祝典のディレクターに任命され、さらに、メトリーズの再組織化の責務を負った。同年、ショロンはエコール・ノルマル・ド・ミュージックを開設し、音楽教育を自ら実践するようになった。

1814年、王政復古によってルイ18世が王位につくと、ショロンの活動は政府の広範な支持を得るようになった。王政復古の時代、王政の復古思想と過去の音楽の復興をめざすショロンの思想は合致するものだったからである。また時代的にも、考古学をはじめ、さまざまな分野で、過去のものに対する興味が高まった時期であった。1816年から17年にかけて短期間オペラ座の支配人をつとめた後、1817年、ショロンは「初等歌唱学校」を開いた。この学校は政府の手厚い保護を受けて、勢力を拡大していき、やがて、パリ音楽院のライバル校となった。とはいえ、ショロンはパリ音楽院と同じ分野で競おうとしていたわけではない。彼は、イデオロギー的にも、教育的にも、パリ音楽院の教育を補完することをめざしていた。

ショロンの「初等歌唱学校」は男女合わせて24名の生徒を入学させるところから始まった。授業料と寄宿費は4年間宮内府から支給された。つまり、王立歌唱・朗唱学校(旧パリ音楽院)とショロンの「初等歌唱学校」は同じ官庁の管轄下にあったのである。

ショロンの学校は名称がたびたび変わり、1820年には「王立特別歌唱学校」、1825年に「王立宗教音楽学校」さらに、1830年には「王立古典音楽学校」となった。その目的とするところも変化し、「王立特別歌唱学校」の場合、パリの歌劇場の合唱団員を養成することだったのに対し、1825年の改組に際しては、大革命以来、伝統が途絶えていた教会音楽家を養成することが第一の目的とされた。ショロンがめざしていたことは教会音楽の伝統を復興することだった。当時のフランスのミサ曲はショロンの目からすれば、まったく宗教的な性格をもたず、世俗的かつ劇的であると思われたのである。ショロンが理想とした教会音楽の形式はア・カペラ様式であったが、これは、オペラから大きな影響を受けていた当時の実際のフランスの宗教音楽のあり方と真っ向から対立するものであった。そうした状況に異議を唱えるショロンは、過去のすぐれた宗教音楽を世に知らせるため、自校の生徒たちによる合唱団を組織し、古楽実践の試



みを広げていった。

実際の音楽教育においては、ショロンはソルフェージュと作曲の教育の仕方を改革しようと試みた。まず、ソルフェージュに関していえば、パリ音楽院で行われていたメソッドは音高と長さを区別していないことが欠陥であると、ショロンは考えた。また、彼は「メソッド・コンセルタント」と呼んだ、集団的な教育法を実践した。これは、生徒のグループの中で、もっとも優れ、進んだ者が、遅れている者の手助けをするという方法であった。

さらに、ショロンは、歌唱に関して、独唱者として、オペラのアリアを歌わせるのではなく、生徒を小さなグループに分け、16、7世紀のポリフォニーの作品を歌わせるようにした。これは、オペラのアリアを歌わせることで、生徒の声が疲弊してしまうことを恐れたからであり、同時に、こうした作品を演奏することによって、生徒たちの趣味が育まれると考えたからであった。この結果が、上に述べた合唱団による古楽実践につながったわけである。

1822年以降、ショロンは自校の生徒による合唱を使って、私的な形で過去の巨匠たちの作品を演奏していたが、1824年からはソルボンヌ大学の教会の毎日曜のミサで、自校の合唱団を歌わせることにした。ここではショロンが20年来さまざまな形で出版してきた作品が演奏され、多くの聴衆を集めた。ちなみにこれは、フランスで歴史的な意識をもって過去の音楽を復興させる初めての試みとなった。

ソルボンヌでの演奏が成功したことに勇気づけられたショロンは、1827年以降、さらにこの形を発展させ、ヴォージラール通りの学校のホールにおいて、生徒たちによる定期的な公開演奏会を開くようになった。このコンサートは1年のうちの6ヶ月、2週間に1回、木曜日に開かれ、そこでは、ジョスカン、パレストリーナ、ジャヌカンなどの作品から18、19世紀初頭にかけてのドイツやイタリアの作品に至るまで、多くの過去の作品のフランス初演が行われた。フランスでパレストリーナとヘンデルが人々の関心を集める存在となったのは、ショロンのこのコンサートで演奏されたことがきっかけだったのである。

作曲教育についても、ショロンは改革を行った。ラモアの和声理論を敵視していた彼は、より実践的なメソッドを推奨し、生徒に理論から教えるのではな

く、実際の音楽に直接触れさせる方法をとった。ドイツやイタリアの教育法から発したこの方法は、生徒に非常に単純なバスにもっとも適した和声を見つけさせ、ついで、あるメロディーに最適のバス・ラインを書いていくというもので、和声の教育と対位法の教育を関連付ける上で長所があった。

1830年の段階で、ショロンの学校はフランス内外でかなりの影響力をもつに至っていた。寄宿生として男子16名、児童4名、女子6名がおり、通学生徒は60名から80名を数えた。ところが、七月革命の後、状況は一変することになった。

## 7. 七月王政下の音楽教育

七月革命以前、ルイ18世没後、シャルル10世が王位についた復古王政末期の6年間(1824 - 30)は、「カトリック反動」の時代であった。たとえば、シャルル10世は中世以来の古式にのっとり、ランスのカテドラルで聖別式を執り行ったが、これは先王ルイ18世も行わなかったことであった。こゑは、新国王が大司教の塗油を受けて戴冠するという、王権神授説を象徴する儀式だったが、ランスの大司教のまえに平伏するシャルル10世の姿は、民衆の間で教権主義への反発をつのらせる結果となった。式場にパリのノートル・ダム大聖堂を選び、自らの手で戴冠したナポレオンの聖別式と比べても見劣りがしたのである。

1830年の七月革命は、こうした「カトリック反動」への拒否反応でもあった。革命後、成立したオルレアン家出身の「市民王」ルイ・フィリップによる七月王政は、カトリックの非国教化をもって始まり、反カトリック的ブルジョア王政という性格を帯びたものとなった。王政が継続したとはいえ、体制が依拠しているイデオロギーはまったく異なり、いまや神授権は再び否定され、カトリックは「フランス人の多数派の宗教」に格下げされ、ユダヤ教にも宗教予算が配分されるようになったのである。

カトリックの非国教化のあおりをまともに食ったのが、ショロンの「王立古典音楽学校」である。七月王政下の1831年5月、国家の助成金は46,000フランから一挙に減らされ、ショロンは恩給の名目で12,000フランを得るのみとなった。その厳しい状況の中で、ショロンは娘と婿、何人かの生徒、オルガ

ン教師と共に、細々と学校を続けたが、1834年失意のうちに世を去った。その後、婿が仕事を引き継いだが、ほどなく閉校せざるを得なかった。しかし、ショロンが教えた生徒の中から、作曲家のイポリット・モンプー(1804-41)やヴィクトル・マッセ(1822-84)、評論家のポール・スキュド(1806-64)、メゾ・ソプラノ歌手のシュトルツ夫人(1815-1903)などの音楽家が育った。

七月王政時に削減されたのはショロンの「王立古典音楽学校」に対する助成金ばかりではなかった。メトリーズに対しても、政府の補助は減らされ、1832年には完全に無くなってしまったのである。

その後、1848年の二月革命以降、振り子は再び逆方向に振れ、1850年、第二共和政下で、大聖堂のメトリーズに対する助成金が復活する。しかし、それまでの空白期間の影響は大きく、メトリーズに有能な楽長をリクルートすることは困難を極めた。その教訓から、1852年、第二帝政期に入り、カトリックが公的な信仰としての地位を回復した後、ショロンの仕事を引き継いだニデルメイエルが宗教音楽学校を設立すると、政府から助成金が与えられ、教会音楽家を養成が活発に行われるようになるのだが、それ以降の19世紀後半のフランスの音楽教育の状況については、稿を改めて述べることにしたい。

## 8. むすび

音楽学校という組織は近代ならではの音楽のあり方を示しているが、一見したところ、あたかも政治や経済から自立したように見える音楽学校自体、実は、政治体制に合わせた形で現れたものであり、革命前後のフランスにおいて、体制の変化と音楽教育とが密接に連動していたことがこの小論を通じて明らかになった。フランスの政治体制の変化は、共和派とカトリックの文化ヘゲモニーをめぐる闘争の歴史でもあるが、音楽教育そのものが、その闘争を鏡のように映し出していたわけである。今回は19世紀前半までを対象とし、また、パリ音楽院については、ほとんど触れることができなかったが、今後、より大きな枠組みの中で論じていきたい。

## 参考文献

- Bévan, Bruno. Les changements de la vie musicale parisienne de 1774-1799, Presses universitaires de France, 1980.
- Fauquet, Joël-Marie Fauquet (éd.), Dictionnaire de la musique en France au XIXe siècle, Paris: Fayard, 2003.
- Lescat, Philippe. «Réflexions sur l'éducation musicale en France au XVIIIe siècle», in L'éducation musicale en France, Histoire et méthode, Presses de l'Université de Paris Sorbonne, 1983.
- Maurat, Edmond. «L'enseignement de la musique en France et les conservatoires de provincez», in Encyclopédie de la musique et dictionnaire du Conservatoire, t.6, Paris: Delagrave, 1931.
- Mongrédien, Jean. La musique en France des Lumières au Romantisme, 1789-1830, Paris: Flammarion, 1986.
- Pistone, Danièle. La musique en France de la Révolution à 1900, Paris : Honoré Champion, 1979.
- 谷川 稔 『十字架と三色旗——もうひとつの近代フランス』 山川出版社、1997.